





日本現代文學全集・講談社版 69

プロレタリア文學集

編	集	
伊	藤	整
龜	井	勝一郎
中	村	光夫
平	野	謙吉
山	本	健

日本現代文學全集

69

プロレタリア文學集

編集

伊藤 整
龜井 勝一郎
中村 光夫
平野 謙
山本 健吉



昭和44年1月10日 印刷

昭和44年1月19日 發行

定價 600圓

© KODANSHA 1969

著者

廣一郎 雄三 吉之
房 欣成 信
田河 村 森 野
前林 里 藤 立
まへん だこう
けやし 田河
さとし 村
ふと 森
たて 野
ほ か

發行者 野間省一
印刷者 北島織衛
發行所 株式會社 講談社

東京都文京區音羽 2-12-21
電話東京 (942) 1111 (大代表)
郵便番號 112
振替東京 3930

印刷 大日本印刷株式會社
寫版 株式會社 興陽社
製本 株式會社 大進堂
製函 株式會社 岡山紙器所
背皮 株式會社 第一紙藝社
表紙クロス 日本クロス工業株式會社
口繪用紙 日本加工製紙株式會社
本文用紙 本州製紙株式會社
函貼用紙 安倍川工業株式會社
見返し用紙 三菱製紙株式會社
扉用紙 神崎製紙株式會社

落丁本・亂丁本はおとりかいたします。

プロレタリア文學集 目次

卷頭寫眞

前田河廣一郎

三等船客……………七

林 房雄

林 檣……………六

繭……………三

里村欣三

苦力頭の表情……………三

藤森成吉

散彈……………四三

土堤の大會……………四七

立野信之

友情……………五

山内謙吾

三つの棺……………七

山本勝治

十姉妹……………八

岩藤雪夫

ガトフ・フセグダア……………九

間宮茂輔	鶏飼いのコムニニスト	三六
朽ちゆく望樓	江口 渙	三三
木村良夫	人生の入り口	三二
嵐に抗して	金 史 良	二六
須井 一	光の中に	二六
綿	中野秀人	二五
窪川鶴次郎	第四階級の文學	二六
風 雲	宮嶋資夫	二七
貴司山治	第四階級の文學	二六
青 服	平林初之輔	二三
平林彪吾	唯物史觀と文學	二六

文藝運動と勞働運動……………二九〇

政治的價值と藝術的價值……………二九四

大宅 壯一

文學的自己清算に就て……………二九六

マルクス主義の自殺か暗殺か……………三〇四

藏原 惟人

プロレタリア・レアリズムへの道……………三〇九

藝術運動當面の緊急問題……………三一五

ナツプ藝術家の新しい任務……………三二〇

藝術理論におけるレーニン主義の

ための闘争……………三二四

勝本清一郎

藝術運動における前衛性と大衆性……………三二九

山田清三郎

プロレタリア藝術運動理論……………三三六

小堀 甚二

プロレタリア藝術運動理論……………三四九

宮本 顯治

敗北の文學……………三五五

甘粕 石介

創作方法と世界觀との相互浸透……………三六七

林 房 雄

プロレタリア文學の再出發……………三七二

川口 浩

否定的リアリズムについて……………三六〇

戶坂潤

認識論としての文藝學……………三六六

岩上順一

考える世代……………三九二

作品解説……………久保田正文三六

プロレタリア文學入門……………紅野敏郎 四六

年譜……………四二四

参考文献……………四四

プロレタリア文學集

前田河廣一郎

三等船客

一

「あれ、擦^すつたい。」
 はねのけるように牆^{かみだか}高な、鼻のひくい、中年期の女のみが發し得る聲が、總體にゆらゆらと傾いた船室の一隅からひびいた。女の姿は何かの蔭になつて見えなかつたが、男は前のめりに動いた姿だけ、汚らしい壁の上に、不自然な暴動の影を投げて、崩れるように暗い方へ消えてしまつた。

「畜生、ふざけてやアがる。」

かなりな距離ではあつたが、さつきからその暗隅を見すかしていた偏目の男は、巻煙草の端を上^{かた}のベッドから床へ投^なげると同時に、もうじつとして見ては居られぬと云う風な性急な言葉を吐いた。

そのわきに、ベッドに匍匐^{はづ}になつて講談本を讀んでいた男も、その時、むづくり頭をあげて、偏目の男の熟視^{じくし}している方を眺めた

が、すぐつまらなさそうに横を向いて、髯^{ひげ}の中で嗤^{わら}つた。

「ハワイへ着いたら尻尾を出すよ。」

偏目の男は、向き直つて對^{あひま}手に何か云いかけようとした刹那、

「わたし、もう立つの。つまらない。ちよつとそこを通してき。」

と早口に云つて、暗隅に居た女が、煤^{すす}けた送風機^{グーシユレキ}の後ろから上氣した顔をあらわしたので、急いでまた元へ向き返つた。

「そんなに急いで立たいでもええじゃないか、かみさん——。」

肺の強そうな、男の聲が、蔭の方から女を追いかけた。

「もう、男の人は、いや。」

脚元があぶないので、送風機の胴へ片手を置きながら、華奢な踵の高い白靴を、船室のまん中の一段高くなつた壇の上へ載せた女は、肥つた笑い顔を、今出て來た方へ向けた。その拍子に、船が一揺れしたので女の手は送風機の胴を離れて、壇上の足が床の上の足と重り合うたと思うと、彼女の兩手はすぐ横手のベッドの鐵柱をめぐけて、身體もろともびつたりと吸いついた。

「おゝ危い。——書生さん、御勉強ですか？ 書生さん。」

抱いた鐵柱をそのまま揺つた彼女は、のびあがるようにして上のベッドを見あげたが、そこにいる青年は頭から毛布を被つて眠つていた。方々の男どもは、彼女の扁平^{へいぺん}つたい顔と派手な格子縞のスカートに向つて犯すようなみだらな視線を注いだ。女はきまり惡げに、いろいろな色合の毛布や蒲團で圍まれたベッドとベッドとの間に、まぎれ込んでしまつた。

「ふられたね。」

うすつべらな笑いととも、妙に細い聲が、暗隅の男へ話しかけたらしく、その邊のベッドから響いた。二三人のえへら笑いがそれに續いた。

「ありや一體何だい、君？」

「酌婦よ。」

「そうかな、それにしても堅氣^{かき}らしい處もあるぜ。」

「君はまだ若いよ。」

正面の上のベッドに、あぐらをかいて、林檎をむきながら話し出した二人の青年の會話も、其時、舷窓の外を、まっ蒼な大幅の波が、強い肩でぐいと船體を押しめして、甲板の上に大男が仆れた時のような物音を立てたので、揉消されてしまつた。亂雑な室内のすべての物は、一瞬間、ふらふらと宙に浮いて、一息ついたかと思つて、又逆にもとの位置へ急にぐらぐらと押し戻された。けたたましい嬰兒や子供の泣き聲と、それらの母親らしい女の聲とが、一時に方々に湧きあがつた。枕元の金盥をさぐる音と生欠伸を囁む聲もそれにまじつた。

「……後ろは禿山、前は海、

尾のない狐がいるそんな、

僕も三度四度騙さアーれいた、

なつちよらん……」

誰やらが、ほそい撓つた鼻聲で突然唄ひ出した流行遅れの歌は、すべての騒音に蔽された病的な空氣をかい潜つて、歌の續く間は人の耳に、船室の勞苦を忘れさせる爲の妙藥のようにひびいた。

「――あすこの隅の奴等は、みんなあれに惚れてるんだそうだ。面白いね。」

偏目の男は、まだ執拗く暗隅の方を見ながら、講談本の男の肩を揺つた。話しかけられた方は、「三行讀み通してから、やつと」……兩人はこれより播州姫路をさして急ぎました。」とある處へ中指を押し入れたまま本を閉じて、充血した眼をあげた。

「そうかね?」――暫く考えるような眼付をしていたが、思い出したように彼は駱駝の晝いてある安煙草を片手でつまんで、「――皆な渴えてる連中ばかりなんだからね。」とシガレットを口へ運びかけて、「この三等室に乗つてゐる女と云う女で、亭主の不在のア彼女つきりだろう。皆なが張りこむのも無理はなからうじやないか。お化粧さえすりや、あんなお多福だつて満更捨てたもんでもないか

らな。――」とシガレットを口にくわえて、枕元の米國製のマツチを鐵柱に擦つた。

「あ、こりや大變。あすこの奴等ばかりと思つたら、君も、もうまいつてゐるんだね。」偏目の男は顔の半分だけで、苦しうに笑つて、いきなり對手の肩を打つた。

「何をぬかす、君こそ、見い、シスコを出帆してから、彼女の聲ばかり狙つてゐるんじゃないか。」

「僕が?」……と云ひかけて偏目の男はさつと顔を赧らめながら、「そ、そんな馬鹿なことがあるけん。」と絡みつくような聲で笑つて、彼は揉みくちやになつた蒲團を敷いたベッドの上へ、くるりと仰向けに寝轉んで、一つの目をつぶつた。

人々の會話の複音は、一種の單調さを以ていつまでも續いた。時時それが、階上の便所の扉が船の震動とともにやけに柱に打ち當る音や、どこかでフライ鍋が吊されたまま壁を傳つて動く拍子にからからと鳴る響や、船腹を撲つて甲板にざわざわと裾を曳く波の音などに寸斷されて、一しお眠そうに響くのであつた。多くの人々から發散する甘酸つばく、饅えたような動物性の臭いが閉された送風機の艙口の爲に、どこへも逃場がなくなつて、辛うじてシイ・デッキの便所の戸口へ通うてゐるので、そこへ溜つた尿素と石炭酸の臭を飽和したまま、再び船室へ舞い下りて來て、八十幾つかのベッドにある夜具の古綿や、めいめいの處に積み重ねた手荷物や、果物の籠や、蒼ざめた顔をして寝ている女共の肺の底までも沁み込んでしまふように思われた。その空氣に浸りつくした船客のうちには、巨きい拇指のびくびく動く足の裏だけを見せてゐる男や、未熟な果物のような乳呑兒にだらけた胸元をひろげて寝ている婦や、青白い腹を露している女の子や、電燈の光の届かぬ邊に蒲團やら子供やらわけのわからぬ黒い團塊になつて突伏してゐる者などが、一様に臭い息を吐いてゐた。折々臨月になつちかい婦が、肩で息をしながら、ベッドの鐵柱傳いによぼよぼと二階の便所へ通う姿などが、多數の視線

につきまとわれて室内から消えて行つた。

廣い物置のような一室に、わずかに五つしかない煤つばけた舷窓の彼方に、黄昏の海は、寒さに刺戟された蒼白い波を戦かしながら、絶えず後ろへ後ろへと流れて行つた。時には、ガラス一枚の外で、まるで瀧のように暗碧の水の渦がどろどろと壁をふるわせて打ち當つたり、それが遠退くと氷山のような水の層が、また近づいて来る大波と、溫和しく抱き合つて、船から離れながら深い谷を作つて渦を巻いて行つたりするのが、恐ろしい他界の不思議な暴力の如く人の眼を脅かすのであつた。

「腹がへつたな、——まだ飯にならんかなア。」皺枯れた聲が、どこからか、そう呟いた。すると、そのすぐ傍から、

「飯つたつて、例のバケツ臭い乾物の煮しめと、鹽つ辛い澤庵漬じや食う氣にならんからね。」と誰やらが、不平らしく懺息した。

その時、色の蒼黒い船室附のボーイが、だらしない雪駄ばきのまま戸口へあらわれて、莫迦丁寧な聲で叫んだ。

「さア、さア、皆さん、これから、船室の検査がありますから、どうぞ床の上へ物を落つことさんようにして下さい。煙草の殻や、蜜柑の皮などね。濟み次第すぐ御飯に致しますよ——。」と妙に船客を鼻であしらうような事を言つていなくなる、人々の間には、

しきりベッドの上へ立ちあがつたり、金盥をかけたついたりする氣勢がして、片頬へべつとり寝亂髪のねばりついた女がきよろきよろ、首だけ擡げてその邊を見廻したり、子供が眠から醒された時に限つて立てる泣き聲などが聞え出した。一日中、必らず誰かがどこかの隅で燃やしている會話の火は、再び船室一杯にひろがった。元氣の良

い掛聲で、上のベッドから飛び降りる若い者などもあつた。

「どうです、かみさん、一寝入りしやしたか？」赭ら顔のがついたりした男が、暗隅からあらわれて、『十三番』と札を貼つた酌婦のベッドへ、ずかずかと寄つて來た。飛びあがるようにして毛布の中から半身を起した女は、まだ眠げな眼をぼんやり睜いて忘れたことを

思い出したように、

「もう、御飯ですか？」と訊ねた。

「御飯——？　そうよ、御飯はとうに済んだがね。あんたがあんまり寝坊しとるんで、もう明日の朝までは御飯にありつけアせんぜ。」

男はとほけ顔をして、女のベッドの片端へ無遠慮に腰をおろした。女は絹の靴下のちらと見えたスカートの邊をかばいながら、無意味な笑いに、健康そうな齒を見せて、ベッドから降り立つた。

「嘘。」

「いいや、ほんとうさ。今御飯をつめた俺の腹アこの通りつつ張つてるがな、觸つて見なされ。——」

「どれ、どれ。——」

「あいたッ。」

その時、三人の男がそのベッドの前へ、やどやと押寄せて來た。

「もう來てるか、早いもの。」

紀州訛の、角顔な、色のなま白い男に續いて、顔の黒い、聲の細い青年が、馴れた聲でわめき立てた。

「妬けるね、いつもこう二人でちんかも、をきめてるのを見ると。」

「そうよ、いくら船中だつてな。」

茶色のスウェータを暖かそうに着た偏目の男が一番後になつた。

五人は狭いベッドに目白押しに掛けて、囁々わめき散らしていたが、突然、いままで静かであつた上のベッドから、色の淺黒い二十五六の青年が、安全剃刀を片手に、半身をあらわして、心持侮蔑を含んだ眼で一同を見競べてから、女へ向つて、

「君、あの鏡をちよつと貸してくれませんか？」と優しく尋ねた。

女の瞳は、素早く青年の視線を掬い上げて、一瞬間、二人の視線は絡みついたように、空中にじつと交錯したまま挑み合つていたが、女は急に媚のある稠高な聲をあげて、

「顔を剃るんですか？」とわざとらしく眼を瞋りながら尋ねたが、やがて男どもを立たせてベッドの邊をそそくさ探し始めた。

「御安くないね、いよう、色男。」

「二階にお輕がのべ鏡かね。」

下の四人は、そんなことを小聲で言い合つた。

「あ、ありました。書生さん。」女は青年の顔を下から覗くようにして、鏡を手渡しながりにツと笑つた。

「よう、よう。」

「俺も書生さんにあやかりたいな。」

人々の聲に遮られた青年の言葉は「……どうも髯が伸びて」と云う一句だけが、女の耳に入つた。女が自分のベッドの方へ戻るといきなり誰かの拳をびしやりと平手で叩く響がした。上のベッドの青年は、ブラッシュで鼻の下や頤へ石鹼を塗り立てた。

この時、かつかつと梯子段を降りて来る五六人の靴音がして、妙に語尾を落した會話のきれぎれが、急にひつそりとなつた一室の内へ響いて來た。船客の多くはベッドから伸びあがつて、検査に來た船の役員どもの姿を訝しそうに見遣つていた。役員は總勢五人で、室のボーイが一番後から、ふだんよりも威張つた表情をして、白のジャケットを着込んでつて來た。眞鍮鈕をひからした彼等は何かの缺點を船客の間から探し出そうとする鋭い眼で隅々を見廻しながら、さもさも重要事らしく何事かを囁き合つて靴音嚴かに次室へ通過して行つた。まづ先に立つた制服制帽の、口髭を短く刈り込んだ、日本人の船長の貌だけは、暫く人々の記憶に残つた。

「船長も冀もあつたもんけい。一體俺達を何と思つてやがるんだ。こう見えても、へん、御客様だぜ。船賃こそ安いかは知らねえが、ちつた人間並の待遇をしる。船會社ア俺達がこうやつて大勢乗り込むからこそ儲かるんだ。こんな臭いとこへぶち込みアがつてさ、あの飯は何だ一體、莫迦にするのもいい加減にしねえか。」

眼の圓い、赤肥りに肥つた老爺が、酒臭い息を吐いて、一番先に煽動家らしい口吻で船室の沈黙を破つた。彼は叫びながら、ベッド

からまん中の食事用の卓へせり出て來て、そこへ括り猿のような拳をとんと置いた。

「そうよ、そうよ、まるで豚小屋じゃねえか、このざまはよ。」百姓らしい老人が、胡麻鹽頭をふりながら、講談本を讀んでいる男の下にベッドから合槌を打つた。それからそれへと、相應する者の聲で、夜になつた一室には、桑港を出てからここ三日間の待遇の悪い會社の仕打を非難する不平で充ちていた。

『十三番』の女を中心として集まつた男どもは、何やらはしやいだ聲で、高らかに唄いながら、折々、どつと笑い崩れていた。

「飯だ。」

正面のベッドにいた二人の青年が、そう叫んで、ベッドを立ちあがつた。送風機の向うから、ボーイが茶碗と箸を入れた籠と、香の物を盛つた鐵葉の皿を抱えながら、動搖する床をふみしめ、ふみしめ、こつちへ運んで來るのが見えた。次室の天井から、湯氣の立つ飯櫃を、汚らしい縄で釣る御すが、立ち奔く船客の間から、手に中へ集まつた。

「飯だ、飯だ。——」

「御飯ですよ。」

「それ、飯、飯、飯ッ。」

口から口へと、この簡単な言葉が、見る見る傳染して行つた。口に出さぬ者も、群衆の勢いに動かされて、腹の中ではかすかに「御飯」と囁かざるを得なかつた。箸箱を持つてベッドから飛び降りる者や、子供の名を呼ぶ聲や、茶碗の壊れる音や、バケツを蹴つた靴音や、人々の重みにきしるベンチの響や——大勢の人が、無造作な會食をする際に起すすべての物音は、船室の萎えた空氣を一變して、急に賑かな、騒々しい景氣付けをした。

「ボーイさん、お菜が來ないぞ！」

「お菜だ、お菜だい、間奴奴。」

「何をしてるんだい。先刻註文しといた蒲焼と口取を忘れるない。」人々は笑いどよめきながら、首を伸ばして次室の天井から、まつ黒い縄で吊り下げられる箆を見ていた。一人の男が、箸で茶碗の縁を、かんかん叩いて、床板をといんと拍子を取つて蹴ると、もう一人の男が、別な場所でもやりと笑いながら、同じことを繰り返した。すると、それをきつかけに、模倣者がそこにもここにも増えて、しまいに、卓へ顔を出した男どもは、皆一齊にその即興の馬鹿囃しを始めた。男どもの間に挟まれた婦達は、狂氣染みた動亂の底に、食慾のなさそうな顔に微笑を囁みながら、うつむいていた。

「さア、さア、皆さん、お待兼ねのお菜が参りましたよ。——鉢巻をしてお食んなさい。頬つべたが落つこちほど甘い物ですよ。食料はついているんですから、御遠慮なしにたんとお食んなさい。——どうぞお静かに願います。」

煮物の小皿を山のように積んだ箆を、汗みどろになつて運んで来たボーイは、唇を歪めて叫びながら、一同を笑わせた。暫くすると、船室はにわかひつそりして、湯を啜る音と、舌打する響と、飯櫃を少しこつちへよこして呉れるようにと囁く聲などが聞えるだけであつた。人々は、時々、茶碗から眼をあげて、自分の周囲を見廻して、これ程大勢の人間がこの船室には居つたかしらと疑うように、卓へ押し掛けた多數の人々を眺めた。席がないので、立ちながら頬張つている者もあつた。食物だけは二等まがいの特別な膳を運んで貰つている者は、尊大らしくベッドの上から下の食卓を瞰下して、ボーイの持つて来るオムレツなどを撮んでいた。箸をつけたと思うと、すぐ吐瀉してしまふ婦なども見受けられた。

二

晚餐のすんだ後には、牛肉の片や、箸の折れや、澤庵の端などが、處嫌わず撒き散らされた飯粒と、煙草の吸殻とに雜つて、恰度、何物かが突然そこへ亂入して、手當り次第にすべての物を破壊

して行つた跡のように思われた。それをボーイがせつせと掃除しているのを見成りながら、人々は蛆のように轉けて行く飯粒や、齒形の立つた大根の端などに、つくづく食物と云うものの氣拙さをさつたような眼付で、めいめいのベッドに飽食の體を横えた。

湯氣のようにむんとする温かみと、すべての物が核心から腐つて行くような臭みとに閉された船室には、だんだん時が経つにつれて、人々の談もやや下火になり、時間の拘束の無い場所であり勝ちな、底深いけだるさと、何かしら強烈な刺激を覚める本能が、陸の生活のすべての約束から解放された人々の頭に根強く湧いて來た。一様に懶い表情をして煙草を吸うたり、とろんとした眼を開けたり閉じたりしている彼等の或者は、折々、何か事件が起ればいいと云う風に、ひよつくり、ベッドから首を擡げて、部室の中を見廻すのであつた。船の暗の粗惡な談や、アメリカ人と喧嘩した談などが、こう云つたふやけた空氣のうちに、ちよろちよろと流れ出ては又すぐ沈黙に吸い込まれた。それでも、女の談だけは執念深くそこに繰り返された。

一隅の上のベッドに、仰向けに寝そべつてトランプを弄つていた青年が、向い側のベッドに鼻唄を歌つている紀州訛の男へ話しかけた。

「やろか。」

話しかけられた方は、しまりの無い唇を開いたなり、流眊に青年の釣りあがつた眉を見遣つて、

「何をするんか。」とじめじめした口吻で訊き返した。

「トワンティ・ワンは？」

「よかろう。」彼は首肯いて、青年の隣のベッドに、膝を組みたててその上へ本を載せて讀んでいた學生に「あんたはどう？」と起きあがりさま、促した。學生は氣輕に受けて、膝の上の本を枕の下へしまい込んだ。三人では面白くないと云うので、『十三番』の女と、緒ら顔の男とが加えられた。五人は青年と學生とのベッドに、珈琲

色の毛布を敷いて、圓座を畫いた。

「親は誰？」

「くじがいい。」

「じゃんけんて定めようよ。」

親になつたのはトラムプを持つた青年であつた。マツチの棒が一人前二十五本ずつ、一本二十仙で各自が親から買うことと決まつた。無聊と倦怠から急に一つの遊戲に集中された五人の人々は、活とした笑顔を浮べ、心の中には一種の家庭的な親しみを共有しているように感じたのであつた。器用に切られて、器用に各自の膝下へ撒かれる札の一枚ずつ増えて行くのを楽しみに待つてゐるかのやうに、四人は妙に張りつめた忍耐力を以て、親の細長い指を油斷なく見成つた。五人の頭の影は、カードを拾うために動く時だけ、ひらひらりと毛布やベッドや壁の上に躍動したが、ややともすると、じつと珈琲色の毛布の上に永い間しがみついて何か深い考え事をでもしているかのように見えた。彼等の弛みない視線と指尖だけが、注意深く働いた。

「もう一枚。」赧ら顔の男は手元に配られた伏せ札とハートの女皇を見くらべていたが、太い聲で呟いた。

「いいの？」親の手からはダイヤの三がひらりと迂り出た。

「よし。」貰つた方は首を縮めて、それを伏せ札と数え合はしてから、強く口を噤んだ。

「そちらは？」

「もらおうか。」

「ほら來た。」

「もう一枚。」紀州訛の男は、手札を二枚開いて、片手で煽るやうな手付をしながら、伏せ札を呼んだ。

「そしら、ブローク。」親は慣れた手付で、マツチを浚つて行つた。

一回目の勝負は、親の全勝に歸した。マツチの大部分は彼の膝下へ無造作に投り込まれた。こうした勝負が、しばらくの間續いた。

マツチはそつちへ集つたり、こつちへ掻きよせられたり、一人の膝の前に手薄になつたと思うと、すぐ又そこへ倍になつて戻つたりした。立ち置めた煙草の煙を通して、

「張りますよ。」

「そら、ブラック・ジャックだ。」

「ああ、これで一弗損しちまつたな。」

などと云う言葉が、次第に静まりかえつて行く船室の片隅から漏れた。いつの間にか風になつた海の上を、迂るやうに進んでいた船は、折々心臓のような機關の鼓動を、遠くの方で間歇的に聞かしている外、時々、海のどこかで、綿の棒で大地を撲つたやうな波の音が、眞夜中の底知れぬ大洋の寢返りを打っている態を想像させるのみであつた。そここのベッドには鼾の聲がだんだん高まつて行つた。

紀州訛の男は、ポケットからウイスキーの罎を出して、

「どうです？」と學生の鼻先へ突付けた。

「いや、いけません。」

「じゃ、あんたは？」突出した手首を動かさずに、罎の口だけ女の方へ向けた。

「ウイスケ？ すこしくださいな。」女は眉根に小皺を刻みながら、罎を受取ると「このまま飲むの？」と罎の貼札と男の顔を見くらべた。

「囁飲よ。」彼は素氣なく答えて、札を切り始めた。罎は女から赧ら顔の男と眉の釣りあがつた青年へ廻つたが、他に飲む人がなかつた。自分の處へ歸つた罎を握むと紀州訛の男はまだ九分通り入つてゐる酒を、本能的に眼の前に翳して見て、ぐいとそのまま口へ持つて行つて、咽喉を鳴らしながら半分ほど飲んでしまつた。飲み終ると「ほーう」と太い息をして、再び罎をポケットへ納めた。カードを撒き終つてから、彼は膝下のマツチを擦つてシガレットに火をつけながら、酒に噺れた聲で、

「さア、少し仰山張るか。——」と云つて、マツチをぼんと外へ投つた。

立ち後れた形で、三人は勝負にならず、伏せ札とジャッキとスपीドの三をじつと手元に見成つていた學生と、彼との勝負になつた。

「見ようか。」學生はマツチのありたけを揚へ拂い出した。その時、隣り合ひに坐つていた『十三番』の女の柔かい膝が、骨張つた學生の膝を二百度ぐいぐいと小突いた。目をあげると、女はほんのり上氣した眼を意味ありげに細めて、彼に胸をした。

親は自分の札を用心深く引いて、一枚だけ手元に伏せて待つていた。

「いこう、——鐵火でいこうかい。」頓て彼は膝の下のマツチを太い手でぐいとまん中へ押し遣つて、學生の顔をじつと覗き込んだ。マツチの大部分は場へ集つた。手合せになると、學生は自信のある手付で、伏せ札を軽く撮んでひよいと場へ開いた。五人の視線は一時にその一枚の札へ集つた。と思うと、急に轉じて親の手元へ撥ね歸つた。そして、突然湧いた一種の感情を陰蔽した時誰もが使うう急激な表情、——沈黙を守つて、恐ろしそうにまん中のマツチの數を目で計つた。すこし經つと、傍の三人は、殆ど同時に叫び出した。

「紀州さん、どうしたの?」

紀州訛の男は酔の廻つた顔をあげて、唇を歪めながら、てれかくいが高く嗤つた。

「ブラフだと思つたら、トワンティ・ワンか。——敗けた。敗けた。」

彼の鼻にかかつた聲は、船室いつぱいに底力のない、からな響を送つた。どこかで、小兒の麗される聲がそれに雜つた。

「わたし、酔つちまつたの。もうよそうじやありませんか。大分遅いわよ。」女は紅くなつた頬を、圓い手で撫でおろして、人一人動いていない船室を、不思議そうに見廻した。マツチを敷えている學

生に向つて、紀州訛の男は、熟柿臭い息を吐きかけながら、「勝つたのう、あんたは。」と取つて付けたような御世辭を浴びせた。ひつそりした室内に皆の勘定している金貨や銀貨の音が、氣味悪くひびいた。

彼は三十弗ほど損をした紀州訛の男は、金を拂い終ると、退屈そうに脊伸びをして、膝を組みなおした。學生に金を敷えてやつていた女がふと眼をあげると、彼の細い鋭い眼が刺すように自分の上に注がれているのを知つたので、彼女は何氣なく、肥つた頬で笑つて見せた。

「あんた、大へん酔つたようだが、一寸甲板へでもあがりましよう。私もこんなに酔つちまつて、どうもならん。そんなに遅いことはないがの、まだ十一時じやけに。」彼は金側の大きい時計を女の方へ向けた。女は顔へ表わした笑いをどう始末していいか迷つたように、不自然な微笑を續けたが、不意に膝を立てながら、冗談らしく答えた。

「連れてつて頂戴な。」

「あれだ。」赭ら顔の男はベッドの梯子をおりかけて、情けなさそうな眼で彼女を見あげた。

「甲板へ出りや、あんたと二人切りじやけに、よ、——」紀州訛の男は女の手を執りながら笑い崩れた。話の繼穗が無さそうに黙つて俯首していた學生は、

「僕もいつしよに行きましようか。」と顔を染めながら言つて、きまり悪げに二人の様子を下眼で見くらべた。

「學生さんも? ……かまわないことよ。いいでしょう?」女は男の手を振り挽いで、紀州訛の男に訊ねた。

「……三人でかい?」彼はぐりと咽喉を鳴らして、一瞬間の躊躇を示したが、すぐ狡猾そうな眼を天井へ投げ、

「……變な御連れさんじやて。」と空囁いた。

「浪にさらわれると危険だよ。」學生は、つけつけと咽喉から鋭い言

葉を吐いたが、言い終つてから自分で自分の拙き加減に苛立つた風に唇を噛みながら、枕の下の本を取り上げた。

女は黒と白の毛織の襟巻をすつぱり頭から被つて、あぶなげな足取で、男の導くままに梯子段をあがつて行つた。

「書生さん、妬いたのう。」男は上甲板へ出る艙口の梯子をのぼりつめて、アメリカ流に女の腕を執つて戸口を跨がせながら、鼻先でせせら笑つた。暗と電燈との境に、彼の金齒がちりりと氣味悪くひかつた。女は不安な表情を見せまいとするように、黙つてただにッとして笑つて見せた。

月の無い晩であつた。のろりと重い海の上を、汽船は幽かに浪を載る音を立てながら、迂るように暗の中へ、暗の中へと深く進んでいるのであつた。風呂桶を長くしたような煙突から右舷へかけて、斑な星の帯が、深い黝い空を斜に切つて、長く幅廣くひろがつていた。仄白い旗を結びつけたマストは、そのすぐ傍の妙に底びかりのする一つの星を、掠めて二三外れたかと思うと、又そこへ戻つて來ながら、わずかに巨船が何物か船よりも強い力に押し動かされながら進んでいるのを暗示していた。蒼茫とした船の外の世界から、青白いものが、大きい皺のように、折々露をわけて、縋れ縋れになつて近づいて、甲板の光圏に入ると黒と青の二幅の波に割れて、船腹を擦るようにさざさわと逃げて行つた。女の後れ毛が片頬へ戯れつくほどの軟風が、どこからともなく吹いていた。

「——ハワイへつくのは、もう二日目？」女は、ずんずん先に立つて急ぐ男を引留めるように、意味のない問を發した。

「三日目だよ、——」男は熱い息を吐きながら、言葉をちぎつて答えた。彼の細い眼は女の全身を取入れてしまうように、いいと彼女の麗な姿を凝視めた。突然男の腕が彼女の背に廻つた。「あんな、さみしいか？」

「そんなことないわ。みんな親切な人ばかりですもの、どこへ行つても。」

「いままでどこにいたの？」

「シスコよ。それから田舎の方へも行つたわ、ババさんと。」

「ババさん幾歳？」

「わたし十六ちがうのよ。姉さんを貰うはずだつたけど、姉さんが他の男と出来ちまつたのでわたし身代りに來たの。わざわざ寫眞と御金を送つて來たんですから、——」女は、一等室の圓窓から漏れる光の前を横ぎる拍子に、まつ黒い海を背負つて、一瞬間くつきりと浮出た男の横顔を、流瞥にちらと見遣つて、聲を落した。男はがつがつと身内に悶を感じた時のように、暫く押黙つてさつさと早足に歩いた。誰もいない甲板には、二人の靴音が不規則に、暗を刻んでどこまでも續いた。船の方へ近づくに従つて、機關の響と船の動きとがより強く感ぜられた。暗に慣れた二人の眼には、その邊の送風機の群やら、起重機の柱やら、艙口の扉やら、欄干やポートなどが、手を觸れたならそのまますうつと暗へ消え失せそうに、青白く立ちならんでいるのがわかつた。甲板の下の方から、まだ寝つかぬ人々の話聲が、厚いガラス窓を徹して響いて來た。二人は自分々々の事を勝手に考へて歩いた。女は幾度か無言で抱きよせる男の執念深い腕をすり抜けたのである。

「わたしあんたのババさんになるがな。——」冷たい欄干へ手を置いた女に、男は背後から優しげな聲で囁いた。

「今夜、あなた大變取れたのねえ。——」女はつかぬことを言つて、壓迫して來る男の力を外らそうと試みた。男は黙つて、鼻から呼吸をした。暫く經つと彼は、

「金なんかどうでもいいや。——」と投げ出したように言つて、海へ向つてべつと唾を吐いた。上のエイ・デッキで誰かの靴音が遠くの方から聞えて來て、又ばつたり止んでしまつた。機關の音が船の胴體の底に、重々しく何かに焦躁を感じたように、急に二人の耳へ入つて來た。男は抵抗の無い女の肩を隻手で搔きよせて、

「いやなの？」と息を喘ませながら、女の唇をもとめた。痙攣的な